

# 大学史料室通信

# 農大

第3号  
2013.6.1

## 大学史料室所蔵史料の紹介（二）

「東京農業大学鳥瞰図」

および「農大よみこみいろはかるた」

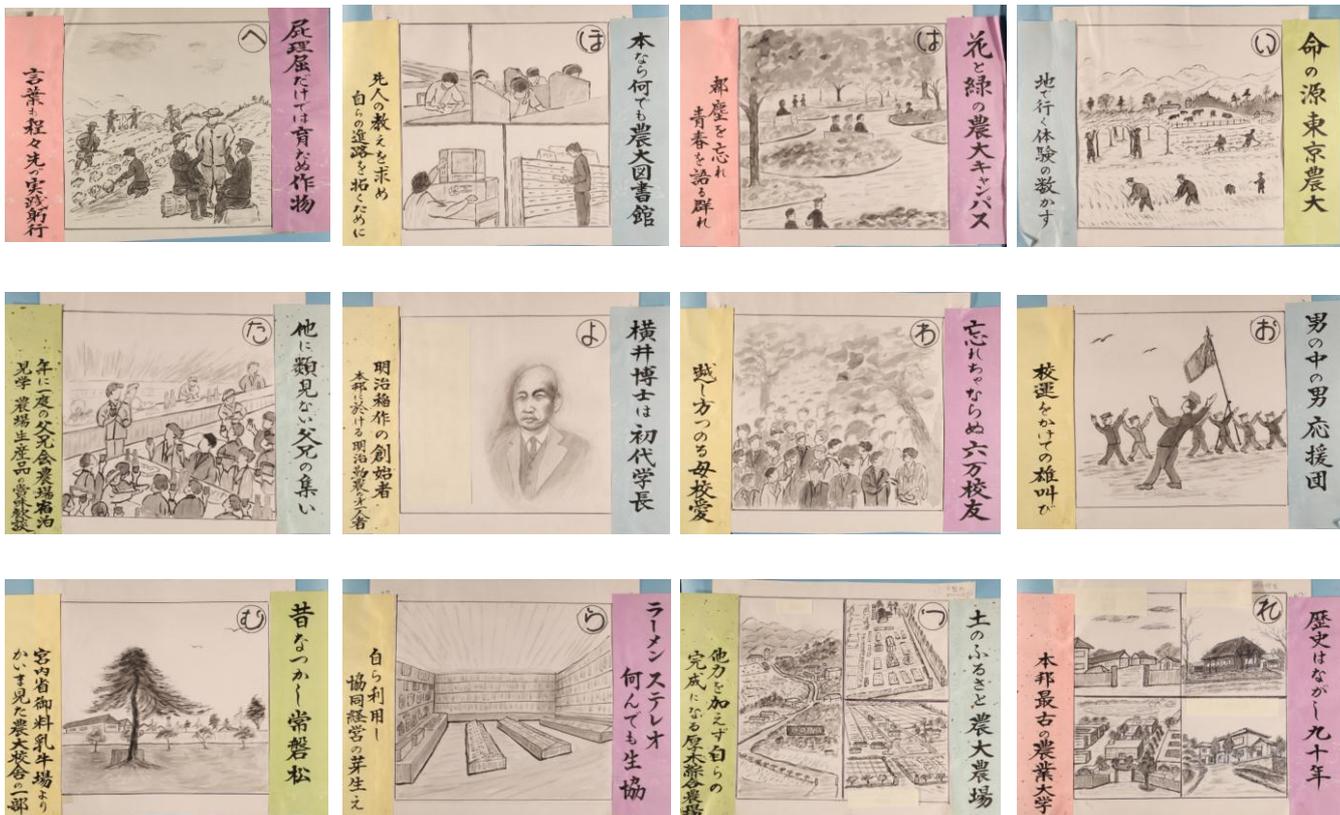


ここに紹介する二つの史料は、いずれも本学卒業生中川音五郎氏の作品である。中川氏は、一八九三年（明治二十六年）、現在の福岡県直方市に生まれ、横井時敬ともゆかりの深い福岡県立農学校を卒業後、一九一五年（大正四年）に、専門学校令による私立東京農業大学（常磐松時代）に入学した。一九一八年（大正七年）、農大を卒業、三井合名会社（三井不動産の前身）に入社し、同社の三井牧場に勤務、のち場長となった。「東京農業大学鳥瞰図」は、卒業頃の大学を思い起こし、一九七一年（昭和四十六年）に描かれたものである。農大に隣接して、上部には「青山学院」があり、左上には「御料乳業場」、さらに「とさわ松」と朱書されている。右、中央よりやや下に、青山ほとりに歌われる聳ゆる「タンク」が描かれている。

二、三頁に掲載した史料は、「農大よみこみいろはかるた」である。ここでは四十七枚のいろはカルタ（と言っても一枚一枚は、通常のカルタよりかなり大きい）のうち一部のみ紹介したが、中川氏が学中の記憶などを中心に、その後、一九八〇年（昭和五十五年）頃までの農大について描いている。「い 命の源東京農大」に始まる読み札と、その解説も興味深い。なお、このカルタは、一九八〇年の収穫祭で展示された。

これらの史料が描かれたのは、いずれも中川氏の晩年である。中川氏は、晩年を世田谷区成城に住まいされ、世田谷区立郷土資料館に陳列されたという「明治の農家の一日」ほか、多くの絵で見る風物詩を描きつつ、老後の生活を楽しまれた。

（友田記）



読み札

い 命の源 東京農大

ろ 論より実践経済学科

は 花と緑の農大キャンパス

に 庭から理論へ造園学科

ほ 本なら何でも農大図書館

へ 尻理屈だけでは育たぬ作物

と 鶏から牛まで畜産学科

ち 中興四代の千葉学長

り 理想は農業づくりの短農科

ぬ 主は化学出 私は栄養出

る るんばも得意な農大生

お 男の中の男 応援団

わ 忘れちゃならぬ六万校友

か 禍を福に 三代佐藤学長

よ 横井博士は初代学長

た 他に類見ない父兄の集い

れ 歴史はながし九十年

そ 育ての親 大日本農会

つ 土のふさと農大農場

ね 根強い伝統 農学科

な 内藤博士は六代学長

ら ラーメン ステレオ 何んでも生協

む 昔なつかし常磐松

解説

地で行く体験の数かず

想いおこす農場生産物の販売実習

都塵を忘れ 青春を語る群れ

よりよき自然環境を想像しつつ

先人の教えを求め自らの進路を拓くために

言葉も程々先づ実践躬行

愛と真理を身につけて

政・産の敏腕家 八十五才の青年いまや亡し

ながい裾野 いばらの道をふみこえて

お互いにいるおいとあたたまりのある家庭を築こう

青春の若き発散のひとつとき

校運をかけたの雄叫び

越し方つもの母校愛

戦後復興に献身 今ぞ見る桜丘の隆昌

明治稲作の創始者 本邦に於ける明治勤農第一人者

年に一度の父兄会農場宿泊見学 農場生産品の賞味歓談

本邦最古の農業大学

日本勸農の主旨による最古の大日本農会総裁梨本宮守正王

他力を加えず自らの完成になる厚木綜合農場

原理の探究応用に及ぶ

日本農業の先駆者の養成につとめた校友二番目の学長

自ら利用し 協同経営の芽生え

宮内省御料乳牛場より かいま見た農大校舎の一部



う	運動は土に鍛えた脚と腕	澁刺堅固の心身發揮
み	井の中の蛙になるまい農大生	とび出し、聞き、見る心根若さ
の	農大の突然変異 時津風	實力統帥の士
を	鬼に金棒 理論に実践	生涯の宝、あのとときあのころを生かす
く	組もうよスクラム教員学生	歯に衣させず セミナーの活用
や	山は奥多摩妙義演習林の林学科	スクスク延びる自然を満喫
ま	眉清らかに一万余徒	国力の一端を担う理想に燃えて
け	健実明朗なれや学生会	談論風発母校のために
ふ	父兄会は大学の架け橋	自らを養い大学の繁栄を祈りつつ
こ	校友初の三浦学長	学生時代は応援団長 剣道部主将 陸上部監督
え	榎本武揚は農大産みの親	質実剛健はこれより始まる
て	手振り優雅な農大音頭	大いに学び 大いに楽しむ
あ	あふれる情熱農友会	収穫祭の風物詩 名物大根おどり
さ	作物の権威 二代学長吉川博士	日本作物学会初代会長 初期の帝国学士院会員
き	機械と水の工学科	飛躍する農具の数々 平和に流れる水、水
ゆ	夢はふくらむ拓殖学科	広大天地勇躍めざして
め	娶るなら佳人揃いの栄養学科	未来の我家に心して
み	魅力はアルカリ清酒 醸造学科	伝統技術を生かしつつ科学的に
し	試験管振る手鮮やか農芸化学科	反応試験を観察しつつ
ゑ	絵になる農大ブロムナード	そぞろ歩きに心もなごむ
ひ	平林鬼の博士は七代学長	かつて独特のアンゴラ兎普及に広く足跡を残された
も	炎ゆる英知の教養課程	日本の衣食住問題解決の先士を目ざして
せ	世界に羽搏けわれらが農大	開け行くはるかな天地
す	鈴木八代学長若さで澁刺	世界括目の蛋白質資源 オキアミの研究者

## 東京農業大学の人々(一) — 渡瀬寅次郎 —

『東京農業大学百年史』を繙くと、本文二頁目に一八九一年(明治二十四年)に陸羯南の経営する日刊新聞『日本』に掲載された育英齋の広告が再録されている。そこには管理長子爵榎本武揚、教頭荒川重秀、幹事真野肇に続いて教師、講師陣が列挙されており、その中に渡瀬寅次郎という名前が見られる。

渡瀬寅次郎(一八五九—一九二六)は、育英齋農学科が独立し東京農学校と改称された一八九三年(明治二十六年)に同校評議員となった。その後、一八九五年、横井時敬らとともに教務委員に挙げられ、さらに一八九七年には大日本農会附属東京農学校商議員となり、最晩年の一九二五年(大正十四年)までその任にあった。東京農業大学関係者の間でもあまり知られていないが、渡瀬は東京農業大学草創期における最も重要な人物の一人だったのである。育英齋農学科時代の教師・講師陣の多くは、札幌農学校出身者である。しかし、その後、教師陣のほとんどは駒場農学校およびその後身校の出身者に取って代わられる。その中で唯一、長期にわたって東京農業大学と関わった札幌農学校出身者が渡瀬であった。

渡瀬寅次郎は、旧幕臣の子弟(弟は渡瀬ラインで知られる動物学者の庄三郎)で、のちに北海道大学総長となる佐藤昌介らと同じく、札幌農学校農学科の一期生である。一期生は、周知のクラーク博士から直接

の薫陶を受けた。卒業後は、開拓使御用掛、札幌県御用掛、農商務省御用掛(北海道事業管理局事務取扱)などを経て、茨城県立中学校長、同師範学校長となったが、一八八九年(明治二十三年)にその職を辞して以降は、終始民間にあつて活躍した。その最大の業績は、一八九二年(明治二十五年)に種苗や農具の販売会社・東京興農園を興したことであろう。東京興農園では、月刊誌『興農雑誌』を刊行し、また横井時敬の『通俗農用種子学』などの書籍も出版している。ちなみに、東京興農園は、種苗等通信販売のパイオニアとも評価されている。渡瀬は、この他、日本園芸会評議員、農商工高等会議議員、大日本農会理事、大阪硫曹株式会社顧問、関東酸曹株式会社顧問、智利硝石普及会日本本部顧問などとして農業界で活躍し、さらに赤坂区会議員・議長、東京市会議員、東京市参事会議員などの公職を歴任した。渡瀬没後、その遺志を継いで、新渡戸稲造や内村鑑三らにより、静岡県との久連に興農学園が設立されている。

(友田記)



## 第三十七回榎本・横井研究会を開催

二〇一三年三月十一日、東京農業大学本部四階会議室において、第三十七回榎本・横井研究会が開催されました。今回の研究会では、榎本隆充会員が、「曾祖父 榎本武揚に係る 近況」というテーマで発表され、活発な意見が交換されました。

## 編集後記

現在、東京農業大学世田谷キャンパスでは、(仮称)新図書館棟の建設が進行中です。建物の竣工は本年秋ですが、新図書館の開館は来年度早々になる予定です。大学史料室もその面目を一新し、活用の利便性はさらに向上するはずです。ご期待下さい。

当史料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記まで、一報くだされば幸いです。

東京農業大学

世田谷学術情報センター(図書館)大学史料室

T 156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話 03-5477-2526

FAX 03-5477-2546